わが青春はハンドボールに燃えて

内記　康晴（新43回生）

このたびは、岩手中、高等学校創立七〇周年を迎え、心よりお喜び申し上げます。

私は、昭和六三年度の春に入学し、在学中に昭和から平成への移り変わりを共に、岩手高校にて過しました。そして、三年間という期間を、かつ、一六歳から一八歳という人生における「青春」という時を、歴史のある岩手高等学校において、一ページを残すことが出来、大変感謝いたしております。

入学するまでは、岩手高等学校とは、男子校という事もあり、どんなに厳しく、男臭い高校なのかと、多少の不安と抵抗はありましたが、数多くの仲間、親身になって頂いた先生方、そして、充実された学習内容、生活環境に十分満足させて頂きました。

反面、驚きもありました。何と、女性の方が一人もいらしゃらない事でした。事務の方も男性、保健室の先生も男性、もちろん教師の方々も、すべて男性というのには、さすがに驚きました。今では、どのようになっているのでしょうか？

私が入学した年は、新校舎の増築、そして県内でもトップクラスの広さと、設備を備えた立派な体育館が私達を迎えてくれました。私は、運が良かったのか、三年間を新築の校舎にて過ごさせて頂きました。校庭の様子がよくうかがえ、窓際の一番前の席であったにもかかわらず、良く外を眺めていたものです。

学生時代における一番の思いでは、一生懸命勉学に取り組んだことですと、書き記したいところですが、そういうわけにはいかず、クラブ活動に取り組んだ事でした。

私はハンドボール部に所属し、三年間を過ごしました。結果の方は、いま一つでしたが、ハンドボールというスポーツを通じて、練習に取り組む姿勢、日頃の練習の大切さ、石桜精神に基づく岩をも砕き立ち上がる精神力を身につける事が、出来たのではないかと思っております。

その時の楽しさ、苦しさ、そして一つの目標へ向かう目的意識を持つこと、また、汗を流すことの気持ち良さは、今でも忘れることが出来ず、心身ともに成長出来た時期ではな

かったかと思います。

三年間の締め括りでもある最後の高校総体では、卒業し、月日が経った今でも、しっかりと覚えております。

三年生が、私一人しかおらず、他すべてが下級生というチームで、市民体の優勝チームに対し、残り二〇秒で、同点に追い付かれ、ラスト五秒で逆転され、惜しくも負けてしまったのです。

勝負の世界とは厳しいもので、勝者と敗者が伴う訳でありますが、なぜ、私達のチームが敗者なのかと、このときほど、審判の試合終了の笛が、信じられない試合は、ありませんでした。ただ、呆然とするだけで、本当に悔しい試合でした。

その後私は、岩手選抜に入りミニ国体へ参加させて頂きましたが、最後の高校総体での悔しい敗北が心に残り、社会人となった今でもハンドボールを続けております。

四国で行われた香川国体へは、社会人として参加し、五位入賞が出来ました。すべてが高校で学び、身に付いたことが役に立ち、結果を残すことが出来たのだと思っております。

岩手高等学校のハンドボール部は、先輩の方々もよく練習を見に来て頂き、ご指導を受けました。そして、整備された専用のコート、最高の体育館。私はハンドボールをするのに十分な環境に大変恵まれていたと思います。

加えて、監督の吉田文明先生、部長で、現在学校長の池口杜孝先生には、数多くのご指導を受け、お世話頂きまして心より感謝いたしております。

今後、八〇周年そして一〇〇周年と歩む母校に対し、伝統そして石桜精神を継承し、新たなる飛躍と発展を期待いたします。

最後に、岩手中、高等学校創立七〇周年記念誌発行に携わられた先輩方に心より感謝を申し上げます。